

特別支援学校小学部生徒の
言語発達及び
コミュニケーション状態の
改善に関する支援

第1回コンサルテーション

1 対象児

- 小学部児童 聴覚障がい及び知的障がい
- 発達年齢：5歳0ヶ月
- とても明るく、人と関わるのが大好きである。
- 発声を伴う手話を使って要求を伝える。
- しなければならないこと等の予定の変更に柔軟に対応できる。
- 「急いである」「早く終わらせる」等についてはこれから一緒に取り組む必要があると感じている。
- ひらがなを学習中。人の名前の一部を指文字で表してサイン的に使用する。

2 9月のコミュニケーションの状態

◆手話・身ぶり【発信】

- 「おはよう」や「ありがとう」に関しては、使う場面、タイミングを考えて、適切に手話で伝えることができています。「～したいです。」を1学期は特に場面を設定し、繰り返し取り組んだ。
※給食時、朝活動、遊びの時間など
- 行き先カードを教員に手渡した後、「行きます」の手話で伝えることにも取り組んでいる。伝えずに教室を出てしまうことがあるため、2学期初めに手順を説明し、再び取り組む予定。
- 要求を伝える時に、ポン！と怒ったそぶりを見せることが多かったが、「～したいです」で伝えることを練習することでポン！とすることが減ったように感じている。

◆ 手話・身ぶり【受信】

- 4月当初と比べると、指示や話を聞く時に、少しずつ相手の目を見る事ができるようになっている。
- 手順書を使ったり、パートスケジュールを使ったりして、調理やボールペンの組み立て等簡単な作業ができる。
- 休憩時間等に起こる教室での出来事や教員とのやりとりの中で、ちょっと面白いことが起こった場面で一緒に笑うことが増えてきている。
- 少し離れた所からの、呼びかけや「ちょっと待って」、「こっち来て」などの指示に対しても少しずつ受け入れ、指示を受け入れることができる場面が増えてきている。
- 話などで分からなかった箇所に関しては、動きを止めて教員を見て確認することが増えてきている。

◆ コミュニケーション態度（他者への関心や伝えようとする意欲など）

- 他者への関心は高く、児童や教員の動きをよく見ている。教室でも、家庭で見ている母が家事をしている様子などをまねることがある。
- 対象児からは、伝えたい事がたくさんあり、発声や身振り手振り、手話がたくさん出てくる。ほとんどの場合、単語レベルでの発信だが、少し機嫌が悪い時や、気分が乗らない時等には、対象児なりの長い手話で、訴えることがある。受け手がその表現を正確に読み取ることは難しいが、前後の出来事等の背景を考慮し、推察している。
- 要求や行き先が書いてあるカードを相手に手渡すことで、正確に相手に自分の要求を伝える方法を練習中。次の段階としては、発声とともにカードを渡す、カードで文を作る事ができるように工夫したい。

3 言語、コミュニケーションに関する 保護者の願い

- ひらがなが読めるようになってほしい。
- 簡単な手話単語を身につけてほしい。
- 4語文の手話ができるようになってほしい。

4 教員の願い

- カード等のツールも活用して、たくさんの方のことを伝えることができるようになってほしい。
- 言いたいのか、やりたいのか、やりたくないのか、を受け手が理解しやすいように発信できるようにしてほしい。
- イライラした時に「～したいの？」と尋ねられて「したい」は促されて言えるようになってきたが、「〇〇がしたい」と自発的に発信できるようにしてほしい。
- 教員の指示や話を聞いて、行動できるようにしてほしい。
- 対象児と楽しくやりとりができるようになりたい。

5 教えていただきたいこと

対象児は、手話の模倣がなかなかできないが、手話をゆっくり表現するようにすると、理解も模倣も少しできているように思う。児童の手話の受信発信のタイプを理解して関わる必要がある、とアドバイザーの他児の事例で読んだことがある。

対象児の手話の受信、発信の特徴をふまえた関わり方の留意点等について、教えていただきたい。

6 アドバイザーからの助言 1

1 コミュニケーションの基本形態

- 対象児が使える言葉を増やすために、対象児がやりたいことについて話をする時に「共同的やりとり」を挟むようにする。

例)好きなことをやろうとしている時、わざと間違えたことをして、対象児の反応を待つ。指摘や説明をしようとしてきたら、すぐに応じるのではなく、「何？わからない」等と言って更に詳しいやりとりを促す。

6 アドバイザーからの助言 2-①

2 コミュニケーションの内容

- 大人が指さしや物の提示を主とする明示的な発信でなく手話による暗示的な発信をするようにすることにより、考えたり状況を分析したりする力を高める。(例：「これ片付けて」ではなく「あれ？これまだあるね」)
- 対象児が動く時に、自分だけでできてしまうことは「のどが渴いた」「先生の椅子がないから取ってきてあげる」等を言わずに動くことが多いので、大人が会話の見本を見せていく。(例：児童の前で大人が「のどが渴いたね」「お茶を飲んでくるね」等の会話を見せる。)

6 アドバイザーからの助言 2-②

- 「終わった」「おいしかった」等の報告的なコミュニケーションも少ないので、大人が意識的に見せていくようにする。
- 今は目の前の事についてのコミュニケーションが多い。次の発達の段階として、これからは過去、未来、遠方のことを話題にしていくと良い。未来のことは、直後の話から始める
とこの2つの間に時間的な順番がある事に気づく。(例：手を洗ったらその後、給食を食べようね)
- 帰りの会で「今日楽しかったこと」を発表する。初めは出来事だけかもしれないが、その内容を詳しく話し合っていくようにする。

6 アドバイザーからの助言 2-③

- 対象児には、コミュニケーションの方法を目で見て獲得していく力があるように感じるので、たくさんのバリエーションの大人同士のやりとりを見せると良い。
- 「できたね」のような共感的な言葉は、時間が経って気持ちが薄らいでからではなく、その気持ちが共有できているタイミングを逃さず話す。その機会を増やすことにより、児童は自分が言いたいことをわかってくれる、と感じることができ、信頼関係ができる。

6 アドバイザーからの助言 3-①

3 コミュニケーションに用いる手話の種類

- 消失型信号と痕跡型信号の組合せ（例：コップを洗う）なら2語文を発信することができる。消失型の手話2単語はまだ難しい（先に表現した手話を記憶しておくことが難しいから）。見てわかる具体物や痕跡型手話を使う方が今はわかりやすい。次の段階に進めるためには、できるだけ1つの話で終わらせず、絵カードなどで2つのことを話すように心がけ、慣れてきたら3つに増やす。

6 アドバイザーからの助言 3-②

- 具体性の高い手話（手話とその意味が見て分かりやすいもの）がわかりやすい段階なので、たくさん身につけていく。生活経験の中で、指さしなどで済ませるのではなく、一つ一つ手話で話をしていく（例：片付けてほしい時、指さしだけでなく「片付ける」「片付けたね」という手話を使っていく）
- 状況判断で理解できる能力があるが、それだけに頼ると様々な手話に触れる機会が減ってしまうので、手話を使ってコミュニケーションするよう心がける。

第1回コンサルテーション後の 取り組みと児童の様子

1 アドバイザーからの助言を受けて

- 「どうしたの？」や「なに？」などの言葉かけを教員側からたくさん行い、対象児が具体的な言葉をたくさん言って教員に伝えるようにすることを共通認識として生活をするようにし、担任や授業に入ってくれている教員でまず共有した。
- 気持ちの共感をする場面を増やすように意識し、「そうだね」や「すごいね」なども積極的に行うようにした。
- 対象児からの、発信（手話やジェスチャー）を教員側が待つ姿勢を改めて見直すことも共有した。
- 発声や発信をするときに、できそうなところから、対象児の表すサインや手話も統一していくようにする。

記録の方法：エピソードの記録

2 記録を振り返って【9月】

- 「～いいですか？」などの発信方法を練習して一生懸命使っている様子が見られ、間違っていないかどうかを確認するアイコンタクトも増えてきた。
- 自分が発信するまで、教員が待ってくれるようになったのを感じてか、何かを伝えようとする場面も増えた。教員から「なに？」とたくさん聞かれるようになって、対象児からも尋ねてくることが増えてきた。

教員が先回りして、発言の機会を減らさないように注意している

【10月】 相手が話している様子をよく見ている

- トイレに行きたくなかった時、「トイレに行っていていいですか？」を、少し迷いながら手話で発信することができた。
- 「どっちがいい？」と選肢を出したり、気分が乗らなかった時に「Aさんが〇〇したから、先生△△するね」など、選肢を出しつつ提案をするというような言葉かけを増やしたりすると、対象児が友達と関わる時にも、わかりやすく選肢を出して、自分から関わろうとする姿が見られた。
- 給食のデザートで、様々な形のチーズが出た時に、自分から先生や友達に「チーズ、何？」と尋ねることがあった。
- 忘れ物を教室に取りに戻った時に、教室にいた教員に「忘れた」と報告をして忘れ物を取りに入室することがあった。

【11月】 報告するような発信が増えた

- 1日の振り返りをして、絵日記を書くことができるようになってきている。色ペンを使って、印象に残っている起こったことを絵にかくことができる。
- 登校後、前日休んでいた担任に対して、「いない」の手話をして、ほかの教員に会った時に「いた」と表現。
- ○先生の顔を見た時に、「絵/○先生/顔」と○先生の顔を絵でかいたと伝えることができた。
- 友達の持ち物が落ちた時に、急いで拾いに行き、手渡してから「私/手伝う」と私が手伝ったと繰り返し伝えてくれた。

【12月】譲ったり受け入れたりできている

- トイレに行きたいことを、着席した状態で教員に手話を使って伝えることができたり、行先カードを自ら取りに行ってトイレに行くことや係の仕事に行くことを伝えることができたりしている。
- 自分がしたいことを伝えることは以前からできているが、自分の意思を突き通そうとするだけでなく、教員からの提案や他の方法を言われたときに、受け入れることができている。
- お楽しみ会で、牛乳をレンジで温めたがぬるかった時に「もっと」と自発的に手話で表した。
- 自分から許可をとること（自分の筆記用具を使ってもいいか等）ができはじめている。

【1月】自分から話しかける事が増えた

- 冬休みが終わって靴箱で久しぶりに会った時、発声と手話で「わー！」と大きい声を出してうれしそうな表情だった。
- 登校後、次にしなければならないことがわかっていて、スケジュールを見て取り組み、終わったらチェックすることができている。
- 対象児の注意がそれて授業から逸脱したときに教員が指導すると、「叱られている雰囲気」を感じ取り、自身で修正することができてきた。
- 自分以外の人たちの、時間の流れのようなものも考えられる事ができているように受け取れる。
- 友達同士が話している様子を見ていて自分の知っている単語（「骨」が丈夫になるという話）が出てくると、それにまつわるエピソード（友達が以前「骨が折れた」）を大人に話しかけていた。

【2月】手話で3～5語文を発信 現前にはないことを伝える

- 体育でバスケットボールをした時に、友達からのパスが、おでこに当たった。教室に帰る途中で養護教諭に会い、「バスケット/パス/か（指文字）/当たった/びっくり」と一連の流れを伝えた。サービスの迎えの人に対しても同様に伝えていた。
- 休日明けの登校で、歯が抜けたところを見せてくれて、「歯/抜いた/ち（指文字）」と言ったり、マラソン記録会の後、「走った/おめでとう/受け取った」と給食の時に話してくれたり、2～3語の手話をつなげて伝えることが増えてきている。
- 給食の前に6年生担任に「下」と話しかけ、伝わらないと見ると「ワゴン」（給食のワゴンを取りに1階に行っている）と伝えることができた。

第2回コンサルテーション

1 5か月間の取組から

- 対象児は、1回目にアドバイザーから助言を受けた「共同的やりとり」「内容の詳しいやりとり」「非現前的コミュニケーション」が増加した。
- 今後、更に手話を拡充し、対象児が楽しくコミュニケーションして思考を深めていくには、どのようなことに気をつけて関わっていけば良いか。

1 アドバイザーからの評価

- 以前のやりとりとは、一方向的なやりとりが多かったが、話す番をお互いに交代するやりとりを意識的に取り入れることで、児童から発信する行動が促進されている。
- 提案や質問、選択をする場面を増やして設定することで、他の児童や教員とのやりとりでもそれを応用した行動や、相手の意図を擦り合わせて交渉・譲歩する行動が見られるようになってきている。
- 相手とわかりあえる価値や可能性に気づくことで、自分に起きた経験や気持ちを相手に報告する行動が見られるようになり、文を構成して発信する行動もみられている。
- 全体的に行動が落ち着き、他者の手話や状況を観察し、その時々に応じた行動を選択するようになってきている。

2 アドバイザーからの助言

- 今後も、教員との関わり方はお互いに話す番を意識的に作って関わるようにする。
- 伝えたいものを増やし、伝える方法を増やす。周りに伝え、会話ができるようにする。それが言語の習得に繋がると考える。
- 定期的に、ビデオを撮り検証をする。課題活動の分析を中心にしてもいいのではないか。
- 両手使用・非接触型の手話表現と書字行動における手指運動の特徴が見受けられたため、各指の巧緻性に課題があるのではないか。手先を使った作業についても課題を作成し繰り返し取り組むと、指文字や手話の表現がより、スムーズになるものが増えるのではないか。

3 今後の課題と取組

- 伝えたいことを増やし、周りに伝え、会話ができるようにする。それを言語の習得に繋げる。
- 分かることを増やす。
- 定期的にビデオを撮り検証する。
- 見通しを伝える。

4 成功のポイント

- アドバイザーから、対象児のコミュニケーションの状態について解説していただき、次の発達のステップと指導のポイントが明確になった。
- 対象児に関わる教員全員で関わり方のポイントを共有した。
- 「一方向的なやりとりにならないようにする意識」と「児童の発信を待つ時間」の共有が、児童の発信を促した。